

論 文

# 術前の装具の仮装着時に抱いた ウロストーマ保有後のイメージ

吉田 由希子・谷口 治枝・多田 晴美  
辻 かおり・幸正 紀代美・弘崎 爾生

金沢大学医学部附属病院

The Image of Urostoma which  
Patients had on Demonstration of  
Urostoma before Surgery

Yukiko Yoshida, Harue Taniguchi, Harumi Tada  
Kaori Tuji, Kiyomi Koushou and Rumi Hirosaki

Kanazawa University Hospital

## キーワード

イメージ, ウロストーマ, 術前オリエンテーション, ウロストーマ装具, ウロストーマ装具の仮装着

## はじめに

近年わが国の膀胱腫瘍患者は徐々に増加傾向にある。膀胱腫瘍患者の多くは尿路ストーマ造設を余儀なくされ、生来備わっている排泄経路と排泄方法が変わることから、健康時に抱いていた自己のボディイメージを大きく修正し、受容していく必要性に迫られる。このことから、手術以前よりウロストーマ保有後のイメージ付けに対する働きかけを行うことが、ウロストーマ受容に大きく影響するものと考えられる<sup>1,2)</sup>。これまでに、参考書やビデオの使用によるイメージ付けの報告は行われているが<sup>3-5)</sup>、仮装着についての報告はない。今回私たちは、患者がウロストーマ保有後の生活を具体的にイメージすることを目的に、術前においてウロストーマ装具の仮装着を試み、それによりどのようなイメージを得たかを明らかにしようと考えた。

## 方 法

調査期間：H11.7～H11.9

対 象：H9.4～H11.7にK大学医学部附

属病院で尿路系の癌のため尿路ストーマ造設術を受け、退院した患者8名の内、面接を承諾した男性2名、女性2名（平均年齢62歳）。

ウロストーマ装具の仮装着の方法：面板と採尿袋をウロストーマ造設予定部位の反対側に実際に装着し、採尿袋内には約100cc、30度程度の湯を入れ一昼夜過ごしてもらう。仮装着施行日は手術日より3～4日前で、手術について詳しい説明が医師より行われた後に行った。仮装着施行が患者にとって負担にならないよう配慮し十分に観察を行った。

面接施行時期：手術から1～2年後で、退院後に施行。

データ収集法：仮装着によって得られたウロストーマ保有後のイメージに関しては、同一研究者による1対1の面接とし、対象者の了承を得て録音して行った。面接は、プライバシーが保証される場所で行い、自由に話してもらうことを原則とし、特に時間の設定はしなかった。半構成的面接法により、病気を告知された時の思い、手術を受けなければいけないと言われたときの思い、仮装

表1 ストーマ保有患者の面接と看護記録から得られた分析結果

事 例	① 大きさ・重さ	② 感 覚	③ 外 見
事例A・49歳 ♂・膀胱腫瘍	意外と大きいな	意外とつけとる感じしない	今までのパンツでも大丈夫。 パンツの社会の窓から出せる から、他人からわからない。
事例B・74歳 ♀・尿道腫瘍	うまく、つくかね。 あら、重たいね	寝るときも気になく寝れた。 歩く時も何ともない。何とも なく過ごせた。何かフラフラ する、そのうち慣れるでしょ	ぴったりしたズボン、はけ ない
事例C・66歳 ♀・膀胱腫瘍	こんな腹に貼っても大丈夫か ね。こんな感じになるんか。	これしているけど、何ともな い	
事例D・60歳 ♂・膀胱腫瘍	外れるような気がして心配	なじんできた。ピシャピシャっ て直に体に当たる	街を歩くなんで心配したけど、 貼っても全然ばれない

表2 対象の背景

	事例A	事例B	事例C	事例D
年齢・性別	49歳・男性	74歳・女性	66歳・女性	60歳・男性
病 名	膀胱腫瘍	尿道腫瘍	膀胱腫瘍	膀胱腫瘍
職 業	自営業	病院のシーツ敷き	主婦	建築業
家族構成  □ は対象者 ○ は死亡				
	5人暮らし	2人暮らし	6人暮らし	1人暮らし
仮装着施行日 (手術の何日前か)	3日前	3日前	4日前	4日前

着を行ったときの思い、その時抱いたウロストーマ保有後のイメージ、手術後の思い、退院してからの思いを中心に質問し語ってもらった。その後逐語録を作成し仮装着によって得られたウロストーマ保有後のイメージが表現されている部分を抜き出した。また、面接は対象に過去を振り返って話してもらうため、面接内容の信頼性を高めるため当時の看護記録からもウロストーマ保有後について表現している部分を収集した。看護記録では仮装着時の患者の様子を、主観的・客観的情報、判断、評価に分け記載し、「ウロストーマ造設を受ける患者の術前看護プログラム表」(術前オリエンテーションの様子を各項目毎に患者の反応、評価、言動を記入し、その時の客観的情報も記入

する用紙)を基に患者の反応、それに対する評価を記載した。また、仮装着施行など術前オリエンテーションはプライマリーナースが行うようにした。看護記録の中の言動から、術前におけるウロストーマ装具の仮装着の試みから得られたイメージを表現しているものを全てを抽出し、面接により得た仮装着によって得られたウロストーマ保有後のイメージと共に研究者全員で分析した。

## 結 果

仮装着時に抱いたウロストーマ保有後のイメージには、①「大きさ・重さ」②「感覚」③「外見」の3個が抽出された(表1)。

## 用語の定義

「大きさ・重さ」とは、ウロストーマ装具を手にとって見たときの大きさ、実際に体に装着したときの大きさ、重さである。

「感覚」とは、ウロストーマ装具を体に装着した時の肌に触れた感じである。

「外見」とは、ウロストーマ装具を装着し、普段どおり衣服を着たときの外から見た自分の様子のことである（表1）。

対象者の背景は、表のとおりである（表2）。

## 考 察

仮装着時に抱いた「大きさ・重さ」に対するイメージからは、以下のことが考えられた。医師や看護婦からの説明や参考書などによりウロストーマ装具の形などを知るが、それが自分の体に貼ると腹部のどれくらいの部位を占めるのか、尿が溜まるとどれくらいの重みがあるのか、またそれがはずれるのではないかという疑問が生じやすい。また、ウロストーマ保有後は24時間絶えず排尿され、採尿袋に溜まるため、尿が漏れるのではないかという不安が生じやすい。以上から実際仮装着することでこれだけの大きさ、重さがあってもはずれない、漏れないということが証明されれば安心感を得ることができると考えられる。

仮装着時に抱いた「感覚」に対するイメージからは、以下のことが考えられた。今まで体についていなかったものが付くことで、日常生活上邪魔になるかならないか、どんな感じなのかというのは患者にとって気になることであり、実際に装着し違和感がどれだけのものかを体験することはとても重要なことだと考える。患者は、尿が溜まっている採尿袋が肌に触れた感じをフラフラ、ピシャピシャと表現しており、採尿袋の感覚が体験できている。その体験を通したことにより、面板を体に貼ること、採尿袋に尿が溜まっていることを意外と気にならなかったと評価している。

仮装着時に抱いた「外見」に対するイメージからは、以下のことが考えられた。膀胱全摘除術とウロストーマ造設術を受ける患者は、排泄経路が変わることから他者の目を気にする傾向にある。そのため、これらの不安を術前に軽減することはウロストーマ造設を受け入れ易くするのに重要である。外出を行い病院以外で過ごすことで自分が想像していたより他者は自分の変化に気付いてはいないことを知った。また、服装も外見・機能面から適しているもの、そうでないものを選択する

ことができた。仮装着により、他者の目、服装などの不安を軽減することができ、ウロストーマ造設を受け入れ易くするのに効果的であるといえる。

林ら<sup>6)</sup>は「ストーマ造設患者は、心の準備が不十分な状態で手術に臨むと、ストーマの受け入れが悪くなり、ストーマに対し拒否的になる」と述べている。このことから、仮装着によりウロストーマ保有後の状態の概略を具体的に知ることは、受容のための心の準備がしやすくなり効果的であると考えられる。ウロストーマ装具の仮装着時、一瞬抵抗を感じたとしても患者の知りたいという思いと看護婦のすすめにより、4事例では①～③に示されたイメージを抱いた。ウロストーマ保有後のイメージに共通して言えることは、患者が造設後生活していく中でさまざまな不安を抱くが、その一部を仮装着することによって軽減できたということである。仮装着では、ウロストーマ造設後の実際の生活状態の一部を五感で知ることが体験できた。このことは、保有後に対し具体的なイメージを持ち、日常生活への自信につながるものと考えられる。仮装着により、ウロストーマ装具がどのようなものかを知ることができ、またウロストーマ保有後の具体的な日常生活の一部をイメージすることができる。このことは、より具体的にウロストーマ保有後を知ることによってウロストーマを受け入れやすくと考えられる。ただ、具体的に保有後を知ることによってウロストーマへの不安をきたす恐れも考えられる。そのため、ウロストーマ装具の仮装着は術前の患者全てに行うのではなく、仮装着を希望した患者に慎重に行わなければならない。

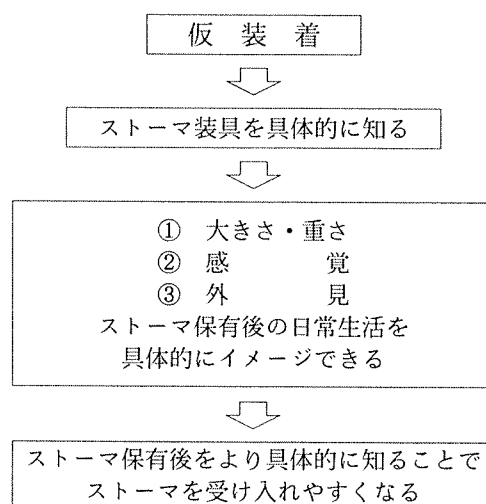


図1 仮装着の効果

## ま と め

1. ウロストーマ装具の仮装着時に抱いたウロストーマ保有後のイメージとして①「大きさ・重さ」②「感覚」③「外見」の3個が抽出された。

2. ウロストーマ装具の仮装着を行うことは保有後の具体的な日常生活の一部をイメージすることができ、ウロストーマ造設を受け入れやすくすると示唆される。

## 文 献

- 1) 小杉秀美：ストーマ造設患者のケア自立に向けて－当病棟での実際－，日本ストーマリハビリテーション学会誌，12(1)，121，1996
- 2) 佐久間明子：ストーマケアが早期に確立した患者の看護－インホームドコンセントが的確に実地されたことによりストーマケアに意欲的に取り組んだ患者の事例，日本ストーマリハビリテーション学会誌，12(1)，129，1996
- 3) 板倉洋子：患者指導教育におけるビデオの有効性について，日本ストーマリハビリテーション学会誌，12(1)，95，1996
- 4) 松原幸子：回腸導管造設術患者の指導用ビデオを作成して ストーマ受容とセルフケアに向けて，日本ストーマリハビリテーション学会誌，11(3)，105，1995
- 5) 角田美沙子：術前オリエンテーションの関わり方を考える－手術前日に不安・不満を表出した患者を通して－，日本ストーマリハビリテーション学会誌，13(3)，84，1997
- 6) 林 美紀：ストーマ受容に向けての術前アプローチの検討－STAIと観察法を用いて－，日本ストーマリハビリテーション学会誌，13(1)，40，1997